

モノと行為、空間の相互関係に関する研究

— 東南アジア大陸部ラオスの低湿地帯KL村を事例として —



K08028 小沼 友希江

Keywords

モノ 行為 空間
室 住居 間取り

1. 研究背景

モノは居室空間に個性をもたらす上で重要であり、居室空間の機能を決定づける大きな要素でもある。また、モノの配置は住む人の生活行為と深く結びついている。このようにモノと生活行為、居室空間は相互に関わり合いながらできている。

しかし疑問が浮かぶ。この関係性は、モノがあふれた日本でだからこそ可能なことなのだろうか。欲しいモノを選択し、手に入れて、居室に置く。それが簡単に行える日本だからこそ、成り立つことなのだろうか。全く違う風土、気候、社会において、モノと生活行為、居住空間はどのように関わっているのだろうか。

これらのことを背景に、本研究では筆者の住む地とは異なるある一村落におけるモノと生活行為、居室空間のありようをフィールドワークを通して調査する。それによって、上に述べた相互関係について究明する。

2. 調査地概要

2.1 KL村概要

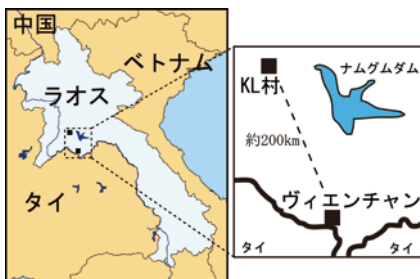


図1 KL村の場所

KL村はラオスの中部に位置し、首都ヴィエンチャンから北北西へ約200kmのところにある。住戸が70戸（空き家を除く）、寺院がひとつあり、人口約330人の村である。村のまわりは山と水田に囲まれている。熱帯モンスーンの気候に属している。雨季は5月から10月の半年間である。

ラオスは1986年から市場経済化政策をとってきたことで、自由で開放的になりつつある。その中で、KL村ではいまだに生業を農業とする人が多く、食料をほぼ自給自足して生活している。住居は竹や木でできた伝統的な高床式が多いが、ここ20年間ではコンクリートや波形鉄板でできた地床式住居も増えている。これは、コンクリー

トや波形鉄板が市場経済化によって普及してきたことが背景にあるからだろう。ここ10年間では電気も普及し、KL村では70軒中69軒の住居に電気が通っている。人々の生活は現在まさに変化の過程にある。

3. 住居空間と生活行為

3.1 KL村の住居形態

KL村の住居には高床式と地床式の二つの形態がある。そのうち、地床式は平屋と二階建ての二つのタイプがある。図2はインタビュー調査からわかった住居形態と建築年の関係を表したものである。高床式住居は1980年から現在まで建設されている。一方、地床式住居は1990年代からつくられはじめた。地床式住居の中でも平屋は2005年からつくられはじめ、二階建てと比べて新しい住居スタイルであることがわかった。

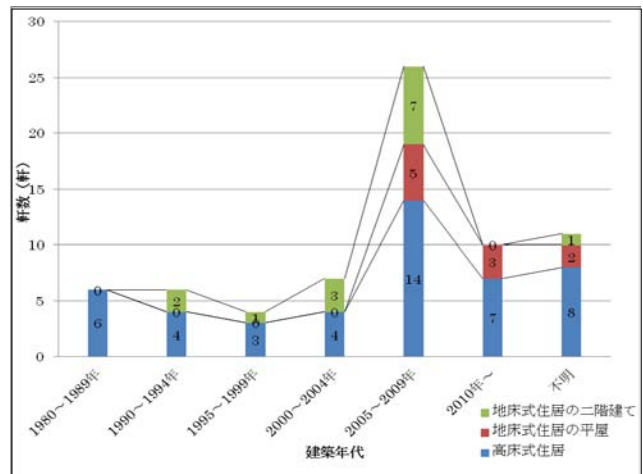


図2 KL村における住居形態別建築年数

KL村の高床式住居はすべて平屋の住居である。空間構成は1つの空間を、寝室とそれ以外の空間の2つに分ける場合と、寝室と炊事場、それ以外の空間の3つに分ける場合がある。

前者の寝室以外の空間を以後は主室と呼ぶ。主室ではテレビを見る、客を招く、食事をするなどといった行為がみられた。以下では、主室に炊事場を含むこのモデルを炊事場内包タイプと呼び、その棟を炊事就寝棟と呼ぶ。

後者はさらに2つに分類する。1つは、炊事場が主室や寝室のように室として独立したモデルで、これを炊事場室タイプと呼び、室として独立した炊事場を特に炊事室

と呼ぶ。この棟は炊事機能と寝室を含むので、炊事場内包タイプと同様、炊事就寝棟と呼ぶ。もう1つは、炊事場が主室や寝室のある棟から独立し、炊事に特化した棟をもつモデルである。このモデルを炊事場分離タイプと呼び、独立した棟を炊事棟と呼ぶ。炊事棟に対して、主室と寝室を含む棟を就寝棟と呼ぶ。

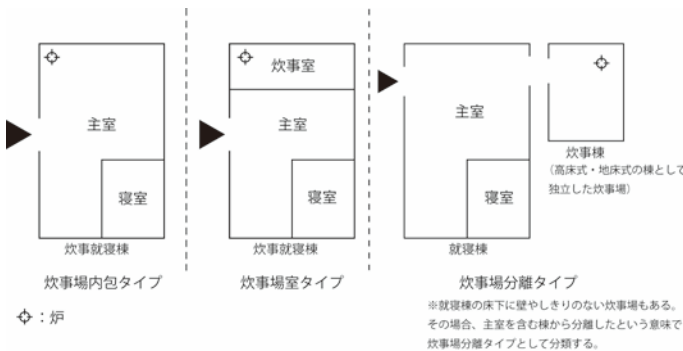


図3 高床式住居の間取りのパターン

地床式住居は平屋の住居と二階建ての住居がある。平屋の場合、空間構成は高床式住居の就寝棟・炊事棟モデルと同様である。二階建ての住居の場合は、一階が主に主室、二階が寝室として使われていた。また、一階には主室と壁を隔てて浴室や便所などの水場と炊事場がある。水場や炊事場は室としてある場合もあれば、隣接する異なる棟にある場合もある。この場合も炊事室や炊事棟と呼ぶ。

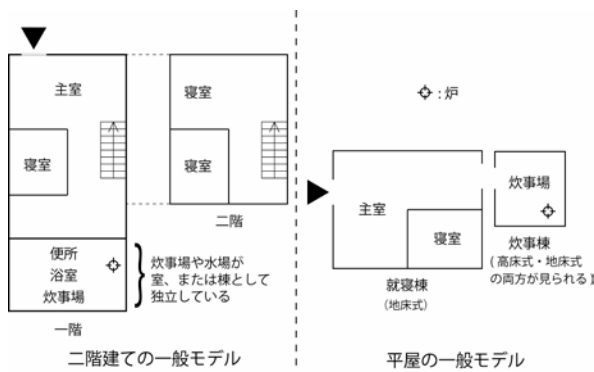


図4 地床式住居の間取りのパターン

以上、2形態のあわせて5パターンの間取り別の軒数のうちわけは以下のとおりである。

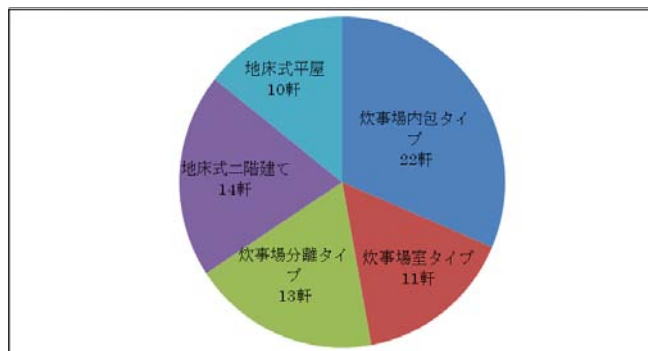


図5 住居形態・タイプ別軒数

3.2 室と行為の関係

以上であげた3つの室、寝室、炊事場、主室ではどのような行為がおこなわれるのか、住人はその室をどのように認識しているのかを、室ごとに示す。

(1) 寝室

寝室は寝るための場所である。基本的には壁によって他の空間との境界がつくられている。また壁がなくても家具や布を使って他の空間との境界がつくられており、他の空間と区別する意識が強く感じられた。KL 村の人々はその場所を「部屋」として認識していた。

ラオスでは一般的に寝室には他の室と比べて信仰に関する決まりがあり、規律が強い。ここで、寝室に関するルールについておさえておく必要がある。人々は棟木に対して垂直に身体を向けて、かつ頭を棟木の外側に向けて寝る。身体を棟木と平行にして寝るのは死者だけとされる。また、信仰の関係上、重要とされる柱がある。柱に込められる意味は健康祈願や子孫繁栄など、解釈は様々である。その柱の近くに家父長が寝て、その次に妻、子供の順に寝るといった、誰がどのような順番でどこに寝るのかという点で決まりごとがある。他にも青年になった男子は親とは別の空間で寝るといったルールがある。

以上のように寝室は、寝るという行為だけではなく、住人の信仰や精神性、社会関係も反映された空間である。

(2) 炊事場

炊事場は炊事をしたり食事をしたりする場所である。高床式の炊事場内包タイプ以外の住居では炊事場が独立して室や棟となっている。炊事は炉で薪を燃やして火をおこし、食べ物を煮たり焼いたり、蒸したりするのが主な調理法である。また、炊事と食事は一連の行為として一貫しているが、炊事場から移動して別の場所で食事をする場合もあるため、必ずしも炊事場が食事をする場所ではない。

もともと伝統的な高床式の炊事場内包タイプの住居があり、炊事場の機能だけが独立したことで、炊事室や炊事棟が生まれた。理由は炉から出るけむりが住居中にこもるのをふせぐためだと考えられる。

(3) 主室

主室は一般にいうリビングのようなものである。食事をしたり、テレビを見たりする。その住居に住む家族が集まる場所である。加えて主室の大きな特徴として見逃せないのは客を招く場所であることだ。住居の入り口は主室にあることが多く、そこに客を通す。そこで食事をしたり、宴会を開いたりする。寝室や炊事場は生活のために必要な機能に特化した空間であるのに対して、主室は家族や、家族以外の他者と関わってコミュニケーションをとる空間である。

3.3 住居を構成する室と行為

住居を構成する寝室、炊事場、主室はそれぞれ、就寝、炊事、接客を含んだ多目的な行為を特徴としていた。しかし住居内でおこなわれている行為はそれだけではない。むしろ室の機能によって導かれる行為だけでなく、それ以外の行為が個人の生活に豊かさをもたらしているのではないだろうか。

4. 行為とモノの関係

4.1 分析

モノは、それが置かれる空間の性質とあわせてみることで、そのモノのまわりでおこる行為を明確にしてくれる。このような考えから各室の中にあるモノに着目して、室でおこなわれる行為をさぐる。

まずは寝室と炊事場のモノを以下の項目に分けて分類する。

- ①室の機能(寝室は就寝、炊事場は炊事)に関するモノ
それらを収納する器
- ②空間の快適性を向上させるモノ
- ③壊れたモノ・使えないモノ
- ④①～③以外のモノ

これらの項目設定の理由について述べる。室の機能に関するモノがその室にあることは明白なので、まずは室の機能に関わるモノ①と、そうでないモノに分ける。②は、室の機能とは関係のないモノの中でも、空間の快適性を向上させるモノがあることでその室で生活する人々

の意識をはかることを目的として設定した。③は、壊れていたり使えないモノが住居にあることでそれがどんな意味を持っているのかを知るために設定した。④はモノの機能と室の機能が一致しないモノを抽出することが目的である。

次に、主室のモノの分類項目について述べる。項目は以下である。

- ①就寝・炊事に関わるモノ
- ②空間の快適性を向上させるモノ
- ③壊れたモノ・使えないモノ
- ④①～③以外のモノ

主室は多目的な空間であり、室の使い方自体に住人の意識があらわれていると考える。したがって、そこにあるすべてのモノも住人の意識と関係しているにとらえてよいだろう。それをふまえて分類項目を設定した。①は寝室や炊事場があるにもかかわらず、その行為が主室にはみ出したことにはなんらかの理由があると考えられるからである。②、③は炊事場と寝室の分類項目と同じことを目的とする。④は、主室の中でおこなわれる行為の多様性をみることができると考える。

以上をふまえて、実際に分析をする。分類したモノをリスト化し、図面上に記す。ここからわかったことを考察する。

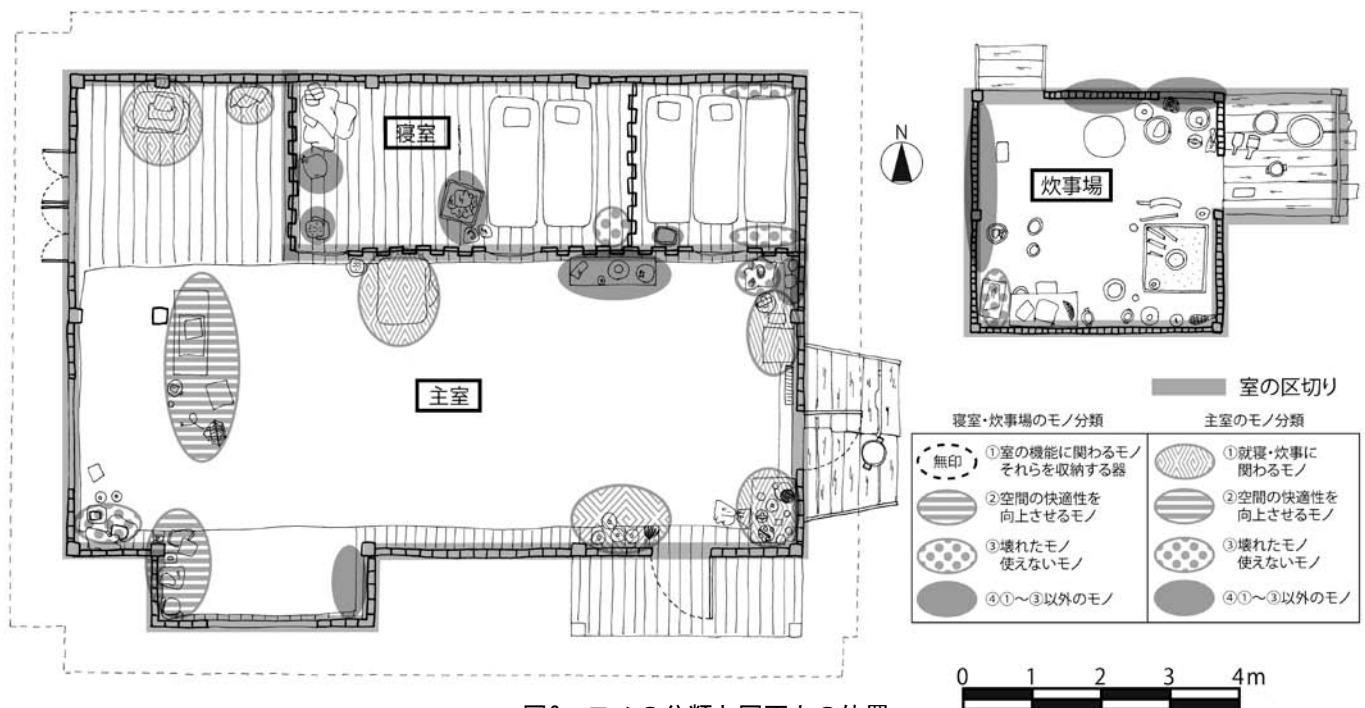


図6 モノの分類と図面上の位置

4.2 モノから見る行為

(1) 寝室でおこなわれていた行為

寝室では就寝のほかに、使わないモノが置かれていた。壊れた扇風機、テレビ、長い間着てない衣類、米の空袋、クッションなど様々なものがみられた。また、聞き取りでわかったこととして、金は寝室にしまうという家庭がみられた。使えるモノの置き場所、壊れたモノの置き場所、大切なモノの置き場所と、さまざまな種類のモノを置いたり収納したりする場所であった。

(2) 炊事場でおこなわれていた行為

炊事場では炊事のほかに、歯磨き、水浴び、洗濯といった、水場に関する行為がみられた。炊事は火を使っておこなうため、水道の通っていないKL村では炊事場の近くに水をためておくバケツやかめがある。そこから上記のような水を使う行為が関連している。また、糸巻きや機織り機などもみられた。ラオスでは女性が炊事をするのが一般的であり、機織りも女性がする仕事とされる。炊事場は女性が使うことが多いことから、女性の空間としての特色を持ち、機織り機といった女性の生業に関するモノも置かれることがわかる。

(3) 主室でおこなわれていた行為

主室では接客のほかに、テレビ観賞、昼寝、などが見られた。テレビについてはKL村全70軒中66軒が所持し、すべての家庭が主室に置いていた。快適性を高めるためにぎぶとんやクッションまた主室の壁には写真やポスターなどの装飾品もあった。貼られ方によっては、壁全体を覆うように新聞やポスターを貼っている事例もあった。その理由は壁の木目を客に見られることが恥ずかしいからとのことだった。また、木の壁は恥ずかしいからコンクリートの壁に変えたいとも述べていた。ここから、主室では家族以外の人の目を気にする意識があることがわかった。

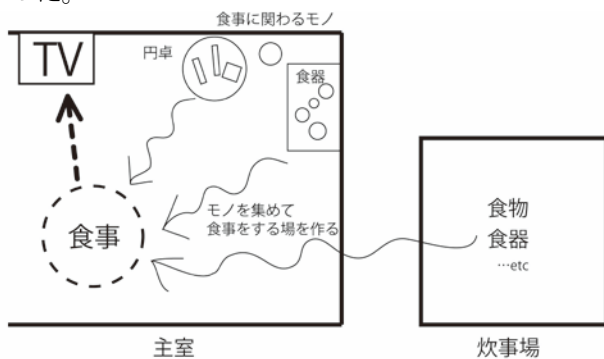


図7 主室における食事をする場所

主室にはもう1つ大きな特徴があった。それは食事をする場所として使っていたことである。これは聞き取り調査からわかったことで、実際に主室にあったモノだけを見ると、食器やテーブルがあっても食物がないため、主室内のみで食事という行為が成立しないことが分かる。つまり、炊事場で調理した食物を主室に移動させ、二つ

の室がかかわることで行為が成り立つのである。なぜ、炊事場から食物を運び、主室で食事をとるのかと言うとテレビがあるからである。KL村ではテレビを持つ66軒中61軒がテレビが置かれた主室で食事をしてきた。聞き取り調査の結果からも、テレビを見ながら食事をする傾向は強かった。

4.3 行為から見る室のつながり

(1) 主室における他者への目と就寝

主室は接客をする空間である。他者の目が気になるから、壁をポスターで覆ったり、クッションを置いたりする。また、モノを壁際に寄せて置き、中央にはモノを置かない。これは他者の目につきにくくするための配置だとも考えられる。モノの配置のしかたにも他者の目が関係していると考えられる。一方寝室は、物置の機能も持つことが特徴である。就寝とは関係のないモノが数多くあること理由は、その室の持つ就寝という行為に関係するというよりは、他の室との関係性に起因するものだと考えた。主室にあったモノの中でも客に見られたくないモノが寝室に置かれるようになったから、寝室が物置化するのである。寝室は他の空間、特に主室と空間的、意識的に明確に区別され、それゆえに主室とは対照的な性質の場所だと考える。

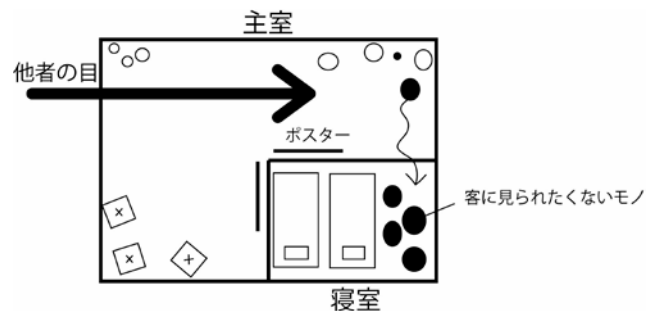


図8 他者の目が主室に与える影響と寝室

(2) 主室における食事と炊事場

食事は、主室で多くみられる行為である。しかし主室のモノを見てみると、食器や円卓があっても食物はなかった。つまり主室という空間だけでは食事という行為は完結しない。炊事場で調理をしたモノや、円卓などの必要なモノを集めて食事をする。このように、一つの生活行為と居室の対応は、常に一対一の関係ではない。一つの生活行為を成り立たせるためには二つ以上の居室が関係しているのである。

参考文献

- 1) ラオス文化研究所『ラオス概説』、めこん、2003。
- 2) 内堀基光「序 ものと人から成る世界」『「もの」の人間世界』、pp.1-22 岩波講座文化人類学 第3巻 岩波書店、1997。
- 3) 西澤信善 他 編『ラオスの開発と国際協力』、めこん、2003。
- 4) 芝浦工業大学工学部建築工学科：2010年度建築工学科卒業研究梗概集、2011年2月。
- 5) 石毛直道『住居空間の人類学』、鹿島出版会、1971。